

見逃してください、邪神様
～落ちこぼれ聖女は推しの
最凶邪神に溺愛される～



イシクロ

Ishikuro

目次

見逃してください、邪神様

～落ちこぼれ聖女は推しの最凶邪神に溺愛される～

書き下ろし番外編

いつも通り

見逃してください、邪神様

く落ちこぼれ聖女は推しの最凶邪神に溺愛されるく

プロローグ

自分がどれくらい前から存在するのか、彼自身知らない。

壊れかけの黒い神殿で石の祭壇に座り、時々戯れに指先で魔物をつくっては地上に送り、気まぐれで天候を操って、時に厄災を振りまいた。眷属を呼んで享楽に耽り淫蕩に身をゆだねたが、そのすべてが。

（退屈だ）

目にうつるすべてが存在するに値しない。地上が形を変え、雨風で岩が砂になるほどの年月を過ごしてなお、その気持ちは変わらない。

（暇……）

祭壇から降りて、長い赤髪を掻きながら裸足で神殿を歩く。いくつも廊下に置いてある鏡のひとつに手を置くとすぐに人の大勢いる地上のようすが見えた。

魔物で間引いているのに、よくもまあこれだけ増えるものだ。自らの瞬きよりも短

い人生を眺めて、なりきってみるのはどうだろう、と思いついたのはどれくらい経った頃か。

人は嫌いではない。魔物よりも感情が豊かで、泣いて怒って笑って彼の厄災からも立ち上がる。愛すべき、殺すべき存在だ。他のすべてのものと同様に。

「退屈しきにはなるかもな」

そうして彼は人の身で地上に降りて——大切な、愛し子に出会った。

序章

目の前で、苦しげに横たわる老年の男性にペコラは手を翳した。

静かに目を閉じると手の甲にある精霊の印が光り、長い白髪がふわりと浮く。

——……やったあはれるぞ——！

波紋を合わせると、ペコラの耳に男性のお腹あたりからそんな小さな声が届く。それに心の中で話しかけた。

「待って、お願いだから大人しくしてくれないかな」

——ええ？

途端に不服そうな声が上がった。同時に男性が苦しげに呻く。

「おじいさんが苦しんでるの！　お願い！」

必死に頼み込むと、しぶしぶ「はーい」という返事があつた。その言葉にほっとしてペコラが薄く目を開けると、男性の呼吸は先ほどよりやわらいでいた。息を吐いて手を下ろす。

「巫子様……夫は」

かたわらで心配そうに『施術』を見ていた、男の妻を振り返る。

「もう大丈夫だと思います」

「ありがとうございます、ありがとうございます巫子様……っ」

継ぎが当てられたマントを被った女性が、ペコラの手を握る。その温かい手を握り返して微笑んだ。

「また具合が悪い時はいつでも呼んでくださいね」

貧民街の一角に建てられたその家から出ると、外は太陽の光がさんさんと降り注いで

いた。

土埃の立つ道に雑多な建物。その路地でたくさんの子どもたちが遊んでいる。楽し

そうなようすを見ながら、ペコラは神殿所属の巫子だとわかる白地に紋章のついたフー
ドを目深に被ろうとして——動きを止めた。

「あれ？　ビートさん？」

ここまでついてきてくれた護衛の神官騎士の姿がない。きろきよろと周りを見回し
ていると、ずいとは横から伸びてきた冷たいモノが頬に当たってペコラは飛び上がった。

「ひゃー」

「お疲れさまです」

「リ、リベリオさん……っ？」

優しげに微笑む青年騎士がそこにいた。

年は二十を過ぎたところ。立派な体躯にまとうのはペコラと同じ、神殿の紋章の入っ
た鎧だ。腰にさした剣も場違いなほど輝いているが、今は何よりその笑顔がまぶしい。

長めの濃い紅色の髪、少し垂れた緑の眼、すっと通った鼻筋に薄い唇の彼は人目を引
きまくる端正な顔立ちをしている。だがその顔を見た瞬間、ペコラは青ざめた。

「どどどどうしてここに」

「ん？ ペコラ様が神殿を出るのが見えたから追いかけてきたんです」
「ビートさんは」

「交代してもらいました。今度オゴるからって言って」

はい、と何事もなかったように先ほどほったくつつけられた竹の水筒を渡される。中には水が入っているのか、とても冷たい。

「ありがとうございます……」

確かに喉は渴いていた。お礼を言って一口飲もうとして……

——はあ、可愛い口。

ふいに聞こえた声に、ペコラはびくっと動きを止めた。

「また一人で施術ですか？」

——先に一口飲んだから、ペコラ様が飲んだら間接キスになるのかな。

目の前の水水入りの水筒を見下ろして、そっとペコラはその口を閉じた。

「こ、これも巫子見習いの修行なので！」

目を合わせないまま足早に歩き出す。すぐに追いついて騎士らしくさりげなく道路側の隣に並んだりペリオに、ペコラは水筒をそろりと返した。

ここ、バウム王国の王都は神殿の総本山を擁する場所である。

巫子というのは神殿に所属し、精霊の力を借りて人々を救う存在、もしくはその代弁者だ。精霊に目をかけられた奇跡の力の持ち主、慈悲の存在、愛し子。彼、彼女らは各地で見出され、この神殿に集められて力の扱い方の教育を受ける。

十八歳のペコラも三年前に孤児院からこの地へやってきた。

だがペコラの巫子としての力は底辺も底辺、ど底辺だ。慈しんでくれている精霊は『万物を土にする生物の精霊』……平たく言えば、ダンゴムシとか、目に見えないほど小さなダニとか、キノコとかミミズとかで、石畳と清潔さ、調和がコンセプトの王都では煙たがられている存在。得意技は生食でうっかり寄生虫を吞み込んでしまった人や、虫歯の治療である。

先ほどのおじいさんも、加熱が甘かった魚で腹痛を起こしていたので、精霊を介して中にいる虫にお願いしてその動きを抑えてもらった。

「日々修行に励んで偉いですね」

リペリオが、ほんとペコラの頭に手を置いた。頭を撫でられながらかたわらを見上げる。背の低いペコラはリペリオの胸元までの身長しかない。

「ペコラ様がすごいのは俺が一番よく知っています」

太陽がよく似合う、顔見知りのこの神官騎士はこんなことをさりとて言う。彼は見習い卒業試験に落ち続けている落ちこぼれのペコラを氣遣つてくれる。強くて見目麗しい^{うつく}彼を専属にしたい正式巫子はたくさんいるのに、こうして貧民街までついてきてくれるほかに。

それはとても嬉しいのだが。

——好きだ。好き、好き好き好き好き。

「っ……」

——そろそろ食べても……まだ早い。ああでも。

「あつペコラ様こんにちは！」

容赦なく飛んでくる不穏な声にブルブルガタ震え始めたところで、顔見知りになった貧民街の人が挨拶してくれた。天の助けとそちらに駆け寄る。

「ペコラ様、これよかつたら食べてって母ちゃんが」

子どもが両手いっぱい果物を差し出してくれた。

「わ、こんなに……レオ、身体の具合は大丈夫？」

「うん、もう平気！」

無理やり果物を持たされたところで、知り合いの老人が近づいてきた。

「あー、すまんが肥料作りを手伝っていただけませんか」

「もちろんですオリバーさん！ ミミズたくさん呼びますね！」

王都の端にある貧民街は人材もモノも足りない。こんな自分でも役に立てることが嬉しかった。知り合いと話しているとふと影が落ちた。日光をさえぎる位置にリベリオが立ったのだ。

「あ、すみませんリベリオさん。お忙しいでしょうし先に戻って……」

青年を見上げてペコラは首を傾げた。なぜだろう、こんなに明るい昼なのに彼の顔に影がかかって表情がうかがえない。

——うまそう。

「果物が!？」

「え」

「……いや、お、美味しそうな果物ですよー！」

「そうですね」

いつも通りの笑顔を見せて、彼は今にもペコラの腕から落ちんばかりの果物をひよいひよいと持ってくる。

(う、うう……)

最近、近くにいると聞こえてくるようになったこれは……おそらくリベリオの心の声。ペコラは名前の通り、よく羊と押揶^やされる癖の強い白髪を掴んだ。なぜこんなことが出来るのかわからない。けれど、優しいお兄さんだと思っていたのになんだかイメージと違うことばかり言うのだ。

ちなみに好き、の言葉に親愛が感じられないのでさらなる恐怖をあおられる。そして何より、ペコラに心の声が聞こえるなんて……

(……リベリオさん、もしかして虫なのかしら……?)

得体の知れない事態に首をひねりつつ、ペコラは凜々^{りり}しい騎士からそっと距離をとった。

第一章 見習い巫子

王都の神殿本部には、正式な巫子が住まう建物と見習いが住む建物がある。

今現在、登録されている正式な巫子が六十名前後、見習いが十名ほど。見習い試験を

合格すれば一人前と認められ、その能力にあわせて配属先が決められる。高位の巫子は都やその近辺で奉仕し、その他は大陸中にある神殿に振り分けられるのだ。

巫子がいない神殿も存在する。ペコラが育った場所もそうだった。

ペコラは自分の力を何も知らないまま、近くの森で精霊と戯れていたところを見出された。巫子の肩書きがあれば出来ることがたくさんある。だからこそ一人で故郷から出てきたのだけれど。

(そろそろ孤児院に帰るべきなのかな……)

見習い巫子の訓練場所の椅子に座って、ペコラは膝に置いた鉢植えを覗き込んだ。

(大丈夫?)

——……キュウウ。

植えている小さな木の根元で、精霊——デフォルメ気味のダンゴムシ——が縮こまっ
てプルプル震えていた。

街ではそれなりに働いてくれるのに、なぜか神殿内ではこんな感じなのだ。……未熟と言われればそれまでなのだが試験の時に限って精霊がだんまりを決め込むので、見事な落第が続いていた。巫子としての基本的能力が疑われるのも当たり前だろう。そっとダンゴムシを撫でるペコラの顔を、同じ見習いが通り過ぎた。

「……ねえ……」

「ほんと、巫子の恥さらしよね」

くすくす笑いながら通り過ぎる彼女たちに返す言葉もなく、鉢植えを持ったまま部屋を出た。

石造りの神殿は数百年前に建てられたもので、高い天井まで細かな装飾が施^{ほどこ}されている。柱は磨かれた大理石で出来ていて、景色が映るほどピカピカに光っていた。中庭にかかる渡り廊下にさしかかったところで、黄色い悲鳴が聞こえてきた。どうやら中庭で神殿の警護^{にぎわ}を担う神官騎士たちが訓練しているらしい。

その一団にはリベリオの姿もあって、見物している巫子や女官が彼に向かって歓声を上げていた。

少し前までは、ペコラも野次馬の後ろでようすを見ていたことを懐かしく思いつつ、つい足を止めてしまう。国の宝である巫子を守る騎士は家柄と能力を重視される。その中でもエースと呼ばれるリベリオは、あつさりと試合形式で同僚を五人抜きしてしまった。

——つまりらん。

冷ややかなリベリオの声が頭に響いて息を呑む。退屈そうな声のわりに、彼は打ち込

んできた騎士の剣を冷静にかわして返す刀で倒した。

——こんなこととするより、あの子を撫でて食べて○○□□××して……

「ひっ」

半分くらい意味のわからない言葉が頭の中に流れ込んできた。そんなことを考えているなどおくびにも出さず、爽やかに次々と相手を屠^{はぶ}っていく青年騎士の姿に女性陣が頬を赤らめている。

——△△して○○○○○○……あ、ペコラ様。

バレた。鉢植えを抱えたままダツシユでその場を逃げ出そうとしたところで——後ろから突然、襟^{えり}を掴まれた。

「ごめんなさい△△はちょっと遠慮します……!」

「何を言っているの?」

ツンとした女性の声に振り返ると、そこにはリベリオではなく金色の美しい髪をさらりとなびかせた少女が女官を数人引き連れて立っていた。

「あなたが見習い巫子のペコラ・ハーバー?」

「は、はい」

「わたくし、本日より神殿にお仕えするエカテリーナ・マグヴァルトといひますの」

彼女はそう言って髪を掻き上げた。

「あなた、何の精霊の愛し子？」

「……」

「エカテリーナ様の質問に答えなさい！」

「え、えっと、ものを土にする虫の」

「虫？」

少し呆然としていたので、女官の言葉に慌てて答えるとエカテリーナに途中でさえぎられた。

「たかが虫の……さすが落第が続けているだけのことはありますわ、おほほほほ」

エカテリーナと名乗った彼女が手を伸ばす。その手首にある精霊の印が光ったと思うと、ペコラが持つていた鉢植えの枝からいくつもの芽が出て、あつという間に見事な花が咲いた。ぱちんと指を鳴らすとその周りを光が飛び回る。

「わたくしには四種の精霊がついていますのよ」

「……はあ」

「土の虫なんてそんな汚らわしい精霊に価値はありません」

「えっと」

「単刀直入に言いますわ、リベリオ様に今後近づかないで。あなたが孤児出身で可哀想だから気にされているだけよ、あの方はわたくしの護衛にこそふさわしい」

「——エカテリーナさん、角でぶつかつたリベリオさんに一目惚れされたんですたっけ……?」

「はっ!? な、なぜそれを……」

エカテリーナがぎよっと目を剥く。人目を引くやりとりに、ざわざわと周りがざわめき始めていた。

「ペコラ様、どうかしました?」

そこにマントを翻^{ひるがえ}してリベリオがやってきた。条件反射で固まったペコラをよそに、リベリオを見て顔を真っ赤にしたエカテリーナは、取り巻きを連れてそそくさと去ってしまった。

「大丈夫ですか?」

「……え、ええと」

答える自分の声をどこか遠くに感じていた。

リベリオを含めて見える景色はどこか、窓一枚隔^{へだ}てたようなもの。そう、これは……液晶画面。途端にペコラのものではない記憶が脳内に流れ込んだ。

夜でも明るい光、どこへでも行ける車や飛行機に、なんでも出来るスマートフォン、本、マンガ——はまっていた乙女ゲーム。自分は前世、日本と呼ばれる国にいた。

「……！」

ぱっと服を見下ろす。ギリシャ風の白い貫頭衣に七分丈のズボン、サンダル。上に羽織るのは足元までのフードつきマント。

このデザインを知っている。さんざん遊んだゲームの世界、主人公は後に大聖女と呼ばれる、六種の精霊に愛された二ナという少女だ。この国に降りかかる災厄を至高の正神とともに払う。そして。

(あ、ああ)

「？」

青ざめながらペコラが顔を上げると、『リベリオ』が首を傾げた。

彼は、邪神だ。以前からこの神殿に身分と姿を偽って入り込んでいて、後に主人公の護衛騎士になり——クライマックス間際で、その正体が判明する。享楽、快楽、墮落、災害、病疫この世のすべてのマイナスを請け負う神。

ペコラの前世の、推しキャラ。

(——推しが目の前に！)

その事実にはペコラはよろめきながら後ろに下がった。

「どうしましたか、熱でも」

大きな手が伸びてきて額に触れた。心配そうな顔に至近距離で覗き込まれペコラは完全に動きを止めた。

(か、かっこいい……っ)

なぜ推しか。それは顔や体格もタイプだし、邪神という存在がまた厨二心をくすぐるためである。

病気がちで入院を繰り返した前世のペコラは、その短い一生の中で原作ゲームだけではなくコミカライズ、小説、アンソロジーや同人誌まで読んだ。リベリオ×主人公は心のオアシスだ。おかげさまで邪神リベリオの主人公への儂い思いとか、己の存在の葛藤について存分に摂取させてもらった。

……唯一最大の問題は、果たしてどこまでが公式か記憶が薄いことだろうか。

(で、ででも、ペコラなんて名前聞いたことがない……よね)

磨かれた大理石の柱にうつる自分をちらりと見る。羊の角のように耳の上に二つのお団子をつくった、背中半ばまで伸びた癖のある白い髪、小麦色の目。

故郷では可愛いねえとご近所さんに言われていたが、美女がたっさんの王都ではどこ

にでもいそうな……垢^{あかぬ}抜けていない顔。その上、虫の精霊の愛し子。こんなのもう考えでもモブだ。

先ほど遭遇したエカテリーナは主人公のライバル役だった。四種の精霊に愛された彼女は、神殿にやってきたものの力をうまく使えない主人公をいじめて最終的に返り討ちにされる運命にある。

「ペコラ様？」

そこで、リベリオに額に手を当てられたままなのに気づいた。触れる皮膚の感覚は人のもので間違いなく、少しひやりとしているけれど体温もある。本当に邪神が人化したものなのだとすると、見事としか言えない。

「……ん？」

そんなことを考えていると彼の目が妖^{あや}しく細められた。手を離れた彼の雰囲気が一瞬で蠱惑的な男のそれに変わってペコラは唾^{つば}を呑み込んだ。

心の底まで覗き込まれるような、竜を思わせる縦筋の邪神の瞳が身体に絡みつく。思わず後ろに下がるとその分距離を詰められ、背中が柱につくと、ゆっくりとペコラの頭の上に手をついたりリベリオの綺麗な顔が近づいてくる。

(ち、近い……っ)

なす術^{すべ}なくあわあわしている、耳元でリベリオが嬉^{うれ}しそうにひそりと囁^{ささや}いた。

「……気づきました？」

——早く早く早く早く早く早く早く早く……

全身の毛穴が開くほどの恐ろしい副音声つきで。

「あ、ああ、あの」

すみません邪神と気づいてしまいましたなんて言えるはずがない。しがないモブ見習いがここで返せる言葉はただひとつ。ペコラは手を組んでぎこちなく微笑んだ。

「何が、でしょうか？」

身体とともに声が震えるのはどうしようもない上に、超棒読み。

(だってそう答えるしかないんだもん！)

ゲームでは最後に種明かしされるまでの間に、彼の正体に気づいた巫子や騎士がことごとく惨^{さい}☆殺される(たまに凌辱^{りやうじゆく}の上)ことを知っているのだから。

「……」

「……」

至近距離で見つめ合うこと数秒。細めた目を戻して威圧を解いたりリベリオはいつも通り人当たりのいい笑顔になる。

「なんでもないです。何か困ったことがあればいつでも頼ってくださいね」
 身を起こした彼にばんばんと頭を叩かれつつ、よく聞くその台詞の意味にようやく気づき、ぶわっと汗が噴き出した。邪神に、何を、頼れと。

* * *

（はあ、やっぱり最高だよおお）

『私』はごろりと寝そべった病室のベッドで攻略本を胸に転がった。表紙には主人公を守る攻略対象六精霊と護衛騎士リベリオの姿。彼ら全員から愛を向けられるのは栗色の髪に青い目の可愛い少女だ。

（なんと言ってもリベリオ様は、主人公以外には表面上優しいだけの鬼畜なのがいいんだよねえ）

「ごろんごろんと転がっていると。」

「——ちゃん、しっかり寝てないとだめよ」

「はいっ」

病室のカーテンを開けられると同時にさっとクッションの下に本を隠す。もちろんべ

テラン看護師にそんなもの通用しないので、うろんな目で見られた。

「……しっかり療養しなさいよ」

「はい」

いつもお世話になっているしっかり者の看護師さんに笑ってクッションに頭を乗せた。小さい頃に病気が見つかったから入院と検査を繰り返してきたこの身体には、あとどれくらいの時間が残っているだろうか。

（ああでもなあ、出来れば火葬は遠慮したいなあ）

理想としてはどこか森の中にでも放置してほしい。親に迷惑をかけまくったこの身体、地球の肥料くらいになればいいのに。

* * *

（……ああ、またこの夢だ）

薄暗い部屋の中で目を開けたベコラは、まずそう思った。

気だるい、とろりと甘い匂いがする夢。目覚めている時は忘れていたのに、以前も見たと夢の中で遅れて気づく。蠟燭の炎だけが灯る部屋に数え切れないほどのむつまじう

男女や獣や魔物がいる、そんな夢。

恍惚に染まり艶めかしい肢体を薄い布で隠して享楽に耽る彼らには、理性というものが存在しない。ただ本能のまま快楽をむさぼっていた。そのようすを、ペコラは数段上の壇上に置かれた長椅子から眺めていた。

『……お前も、してみたいだろう?』

後ろから伸びてきた手がペコラの頤を掴む。いつの間にか長椅子にはゆったりとした服を着た、浅黒い肌の男がいてペコラを膝に乗せていた。

黒く長い爪の手で顎を掴まれながらふると首を振る。はいと口に出せば、ペコラもあそこに堕ちる。数名の男が一人の女性を襲って交尾が始まった。魔物が人間を襲う。何をしても皆、悦びの表情でそれを受け入れているが、恐ろしいことに変わらない。

『そんなことはしないよ。誰もお前には触れさせない』

唇の動きがわかるくらい近くで囁かれるのは蜂蜜みたいな甘い声だ。一面に白い刺青のある浅黒い男の手が、薄衣の上からペコラの身体の線をなぞった。

「あ、……」

逃げようとする身体を捕らえて大きな手が膨らみかけの胸をこねる。すると、太腿の間に指が滑り込む。恐ろしいと言いながらも目を背けられない狂宴の間に濡れた身体

の中心に潜り込んだ。

「っ待……や」

『早く、こちらへ』

耳を舐める感触と鼓膜を震わせる低い声が思考をかき混ぜる。どこかで耳にしたようなそれを聞き、震えつつペコラは目を閉じた。

* * *

朝のお勤めを終えた後は朝食の時間だ。巫子見習いのメニューは黒パンとスープという素朴なもののだが素材は上質なものを使用していて、味はいい。ペコラは椅子について寝不足の目を擦った。

（なんだかいろいろ夢を見た気がするけど……）

寝たのに寝た気がしない。あくびを手で隠しつつ、目の前のスープに沈むひよこ豆をつついた。衝撃的な事実が判明してから一晩が過ぎた。

集めた情報をひとまず整理してみることにする。

——一、ここは前世で遊んだゲームの世界（十八禁）。

——二、ペコラは物語の舞台である神殿の巫子見習い。

だがゲーム内にその名のキャラがいた記憶がない。つまり自分は主人公かそれに準ずるキャラではない。

——三、捜してみたがヒロインらしき巫子及び巫子見習いはいない。

六精霊に愛されているのだ、いるとすればさすがに存在を知らないわけではない。まだ力が具現化せず神殿に見出されていないのだろう。

(確か住んでいた村が魔物に襲われるのだっけ……)

目の前で父親が魔物に殺された時に眠っていた力が現れ、孤児になった彼女は神殿に保護される。

「……魔物、かあ」

——四、隣に座っているリベリオはどこかの時点でヒロインの護衛になる。

「……な、何か？」

真横から刺すような彼の視線に耐えきれず、ペコラはへらりと口を歪めた。いつの間にか隣の席で頬杖をついて座っているリベリオは今日も愛想よく微笑んだ。

「おはようございます。気にしないでください、ペコラ様が真剣にひよこ豆をつつくのを見ていただけですから」

リベリオが頬杖をついたまま明るく返す。なんだか今日はいつもより無駄に元気そうなのは気のせいだろうか。

(……うううあかっこいいい……！)

真面目につくろった顔を背けて、赤くなった頬を押さえた。大好きだったキャラが隣にいるのだ。そうと気づいてしまえば冷静になれるはずがない。

そもそも、ペコラはリベリオのことを嫌いなわけはなく——むしろ、頼り甲斐があつて好ましく思っていた。ただ謎の声が怖すぎるから敬遠してただけで。

けれど彼が好きなのはヒロインだ。こうしてペコラにちょっとしたいを出すのにもそのうち飽きるのだろう。ということが一番大切なことはいと。

——五、一刻も早く、物語の舞台である神殿から離れるべきである。

(だって今生こそは長生きしたい！)

切実な問題である。しかもペコラがリベリオの正体に気づいたと知られば、問答無用の邪神バッドエンドが待っているならなおさら。

(信者や魔物を集めて皆で落ちこぼれ巫子の私を辱めるんだ。エロ同人誌みたいに！
エロ同人誌みたいにいいいいいい)

指を組んでガタガタ震えた。ちなみに享楽、快楽、墮落、強欲を好む邪神は王都でも

一部に圧倒的人気を誇る。表立ってはもちろん信仰出来ないで隠れ信者がとつても多い。

「……早急に、行動にうつさないと」

そこで、ふに、とりペリオの指が頬をついた。

「……何してるんですか？」

「美味しそうなほっぺだと思って」

それはお肉的な話でしょうか。

「あ、ありがとうございます……？」

引きつりながらそくさとトレイを持って席を立つ。考えごとをしていた間に他の巫子見習いは座学に移動していた。振る舞いや歴史を習うその授業をペコラはとくに合格しているので出席する必要はない。

廊下に出たペコラを当然のようにリペリオが追いかけてきた。

「今日も貧民街に？」

「その前にちょっと用事を済ませてからですが。……今度こそは試験に合格しないと……つ、地元の神殿に勤める夢もありますし！」

力を使えば使うほど精霊との結びつきは強くなる。お役にも立てて一石二鳥だ。

「ペコラ様が合格したら俺もついていこうかな」

「い、いいいです！ リペリオさんはここですることたくさんあるじゃないですか。せか……」

「せか？」

「せー……かっこうをはかったり？」

「背格好？」

「は！ そうだ！」

言い訳にしても苦しすぎるが、自分で言って気づいてしまった。ヒロインが神殿に来たら、リペリオが世界滅亡を企んだり、ヒロインちゃんに迫ったりするゲーム内容が始まるのだ。

「見てみたい……！」

出来れば特等席で、かぶりつきで心のメモリーにおさめたい。そう思いつつペコラはちらりと隣を歩くリペリオを見た。

（それと……邪神の恋を成就させてあげたい……な）

ゲームではハッピーエンドは六精霊や正神とばかりだった。

リペリオルトは悲恋、もしくはメリーバッドエンド。でもペコラはヒロインが神殿

に来てからどんなことが起こるのかはわかつている。それを利用したら、もしかして幸せな二人の結末を見ることが出来るかも。

（いやいや、何を大それた……）

心の中に浮かんだアイデアを首を振って追い出した。それよりも先にしなければならぬことがある。ついてきたそうなりベリオをペコラは全力で走って振り切った。

「……エルモ地方に行きたいというんですね？」

ペコラは見習いの管轄かんかくをしている神官の元を訪ねた。髭ひげをたくわえた壮年の神官はペコラの話聞いて、机の上に広げた地図を前に顔をしかめる。

「はい。転移陣を使う許可はいただけますか？」

ペコラが地図で示した赤丸は魔物が住む地域と人間の住む地域の境界近く——ゲームのヒロインが住んでいるはずの場所だ。

ライバルのエカテリーナが神殿に来たということは彼女にもそろそろ動きがあるかもしれない。つまり、住んでいた村が魔物に襲われて壊滅状態になる。本当にそんなことが起こるのか、回避出来る方法はないか、出来れば自分で確認したかった。

神官が咳払いをした。

「ペコラ様。……さすがに次の試験で何の奇跡も起こせないようなら、見習いの身分も剥奪はくたつさせていただくという話が出ていますので」

「うぐっ」

「神殿の外のことは聞いております。ですが巫子の力はあくまで平等に国と民を支えるもの。特定の区域にだけ目をかける行為は目に余ります」

「で、でも、あそこにはもともと必要なものもないのです。それなら国のほうからもう少し目を配るようお願い出来ませんか」

「とにかく、あくまで決められた基準で、どここの場所であれ同じ能力を使っていたかなければなりません」

「……はい」

シユンとして部屋を出た。それでも長期出張の名目で外出証はもらえた。神殿の転移陣を使う許可も。

各地の神殿には転移部屋もろが設けられていて、例えば一気に長距離を移動出来る。ご都合主義だがゲーム世界なのでそういうもののだと思おう。もちろん見習いの地位を剥奪されて神殿を追い出されれば使えなくなるものだ。

（……これが最後のチャンスかも）

なんとしてもヒロインちゃんを見つけ出さなければ。ペコラは気合を入れ直した。

第二章 ヒロインを捜して

床に描かれている転移陣から一歩外に出ると、その光が収束して消えていく。

「ようこそお越しくださいました、ペコラ・ハーバー様」

目の前にいる神官がペコラに頭を下げる。それに下げ返して顔を上げた。

エルモ地方に唯一ある神殿は王都のものに比べてごく小さく簡素なものだ。仕えている神官も少ないが綺麗に整頓されていた。

「突然の無理を言って申し訳ありません」

「いえ、こんな辺境までわざわざお越しいただき光栄です。……ですが」

きよろきよろと周りを見回して、神官が首を傾げた。

「護衛の神官騎士も連れずお一人で、ですか」

「ええ、まあ……」

ペコラはあいまいに笑って言葉をにがした。キュ、と肩に乗っているダンゴムシ型の

精霊も返事をした。

四精霊に愛されているエカテリーナに目の敵にかたみされてしまい、出立までの間にも何かと嫌がらせを受けていた。他の巫子や女官、騎士が落ちこぼれのペコラにつくかエカテリーナにつくかといわれれば……

（これがいじわるイベント……!）

笑みを隠して両手を握る。感動せずにいられようか、ゲームのイベントを疑似体験出来るとはなんとたる幸運。

（高笑いしているエカテリーナの立ち姿は綺麗だったし、役得役得）

そんなわけで一人旅になったのである。ちなみに派閥のゴタゴタを気にしない、仲のいい神官騎士ビートはちょうど奥さんの出産で休暇をとっている。

「危険でしたらすぐ戻ります。えっとでは、連絡した通り近くの村々を回らせていただきますね」

だいたいの地域はわかるが、ヒロインがいる具体的な村の名前はわからない。神官に付近の集落の場所を教えてもらってひとつずつ確認していくつもりだった。

巫子と知られると大ごとになるので普通の旅人風の貫頭衣、ズボン、サンダル、旅用マントに肩かけの鞆という格好で川に沿って進む。神官がついていくと言ってくれたが、

遠慮させてもらった。野生動物や魔物がいる可能性もあるけれど、危険があればすぐダンゴムシが知らせてくれる。

初夏でまだ気温は高くはないのが幸いだ。途中、川辺の岩に座ってサンダルを脱ぎ素足を冷たい水に浸す。

——キュウ。キュウ。

「あんまり遠くに行かないようにね」

ダンゴムシもペコラの肩から下りて岩の上をてちてちと散歩している。川辺からはすぐ森になっていて、端は太陽の光が明るく差し込んでいるが先はほぼ獣道しかない。それを眺めて足を動かした。

（冷たくて気持ちいい）

ばちやばちやと水の表面を足ですくつては飛沫をあげて遊んでいると。

……

「っ」

ふいに何か邪念が入ってきて、ペコラは固まった。

——あの足、舐めたら甘いだろうな。

そろりと川から足を上げる。

——つま先から舌で撫でて指の間を泣くほど〇〇して×××

いる。邪神リペリオが確実に近くにいる。不穏な声に何事もない顔をして素早く足を拭いてサンダルを履き、ダンゴムシを拾って歩き出した。

——キュ？

（ど、どうして……っ、神官以外には行き先を言っていないのに！）

不思議そうに見上げるダンゴムシをなだめて、あわあわと足早にその場を去る。

——ペコラ様も水くさい。言ってくれば魔物の十や二十、俺が一人で蹴散らすのに。（あなた魔物の総大将ですしね！）

人間の住む外の世界を支配し、たまに境界を越えてくる魔物は邪神の管轄とされている。十や二十どころか、その気になれば絶滅もさせられるだろう。

「……きやああ！」

「！」

森の奥から悲鳴が聞こえたのはその時だった。切羽詰まった子どもの声にペコラはその方向に走った。

「ウルルルウウオオオ!!」

狂暴そうな獣の声。近くの村の子だろうか、十を超えたくらいの子どもが狼たちの群

れに囲まれていた。

「ダンゴムシくんお願い！」

——キュー！

ペコラがダンゴムシに呼びかけると一斉に土の中にいた虫たちが狼に殺到する。突然の攻撃に飛び跳ねる獣の間を走って、地面に座り込む子どもの手を引いた。

「今のうちに！」

「で、でも、足が」

よほど怖い思いをしたのだろう、栗色の髪の少女はガクガクと震えていた。

「背中……っ」

おんぶをしようと背中を向けてしゃがんだところで、虫をまとった狼が悶えながら襲いかかってくる。とっさにペコラが手を広げて女の子を庇うと——ドン、という大きな音とともに目の前で稲妻が狼に直撃した。

「……え」

赤くて大きな口を開けたまま狼が黒焦げになって倒れる。果然としているうちに、慌てふためく群れの真ん中にも雷が落ちた。思わず空を見上げるが、雲ひとつない青空だ。

「大丈夫ですか!？」

そこで、腰の剣を抜いたりベリオが駆け込んでペコラたちと狼の間に入り込んだ。

「……」

「ペコラ様？」

「あ、いえ……ありがとうございます……」

濃紅の髪を風に揺らして立つリベリオの姿がかっこよくて見惚れていた。

雷で腰が引けた狼たちが後ずさりしていく。轉身した彼らを見てはっとペコラが息を吐いたところで、まだ周囲を警戒しつつリベリオが剣をしまった。

眉をひそめた彼がペコラの目の前で膝をつく。

「神殿を一人で出たという話を聞いて慌てて追ってきました。……どうして俺に相談してくれないんですか」

「そ、それはその」

拗ねたように言った彼がペコラの頬に手を伸ばす、その指が触れる直前で、女の子がペコラの服を引いた。

「もしかして巫子様!? 今のは精霊の奇跡の力!？」

青い目をキラキラと輝かせた彼女に先にうなずいたのはリベリオだった。

「そうだよ。君は近くの村の子?」

改めて見ると、簡素な服を着ていても人目を引く愛らしい少女だ。リベリオの言葉に彼女は視線を下げた。その小さな手には白い花のついた植物が握られている。

「うん……お母さんの、病気に効く薬草を取りに来たの」

ペコラは微笑んでその頭を撫でた。

「そう、偉いね。でも一人で無茶をしてはダメよ」

「……ペコラ様は人のことを言えないような」

非難の声と視線に小さくなると、リベリオが女の子に背を向けた。

「村まで送ろう」

簡易鎧を身につけたまま背負って軽々と立ち上がる。もう少し行ったところに小さな集落があると女の子は指で方角を指示した。

「お名前は？」

「ニナです、巫子様！」

頬を染めてハキハキ答えるその名前にペコラは引っかかりを覚えた。

ニナ。リベリオ×主人^{ニナ}公。

ペコラはリベリオが負ぶっている女の子を見た。明るい栗色の髪に青い目。成長したら美女になるのがわかる愛らしい容貌。この子はもしかして……

「——ヒロインちゃん!？」

「どうかしましたか？」

「い、いえ、何も！」

まさかこんな偶然があるものだろうか。半信半疑のままニナの住む村に向かう。

辺境の山間は日が暮れるのも早い。足早に夕暮れの森を抜けると、柵^{さく}を巡らせた村の周りに松明^{たいちう}が焚かれていて、遠目にも武器を持った村人たちの姿が見えた。

「お父さん！」

リベリオの背から地面に下りたニナが、その中の一人に向かって駆け出した。

「ニナ!? 心配したんだぞ、最近は何夜以外でも狼が出るのに……っ」

「ごめんなさい! でも、巫子様たちが助けてくれたの!」

体格のいい父親がこちらを見た。

「……やっぱり」

その顔を見てペコラは確信した。魔物に村が襲われた時に、ヒロインであるニナを庇って亡くなる父親その人だ。

「巫子様……ああ、ありがとうございます! なんとお礼を言えばいいのか」

「いえ、私は見習いで……それに助けたのは彼です」

リベリオを示すと、彼はにっこり笑った。

「俺はペコラ様の専属騎士ですから、俺の手柄はペコラ様の手柄ということだ」

「せ……？」

いつの間にそうなった。ペコラが肩を震わせていると、その言葉を聞いた父親が並ぶ二人を見比べる。

「はああ、なるほどどうりでお似合い……」

「違います！ 彼は普通に神官騎士で」

「そんな水くさいこと言わないでくださいよ」

「みみみ水くさいとかそういう問題じゃ」

「あ」

そこで小さく声がした。皆がそちらに注目すると、大きな目を見開いていた二ナがぱっと口に手を置いた。その手に握られたままの薬草を見て大事なことを思い出す。

「奥様がご病気だとお聞きしましたが」

「ええ……」

父親は二ナの頭を撫でて、山の向こう、魔物の住まう領域に目を向ける。

「最近、こちらで魔物の動きが活発化していて……住処を追われた獣に襲われました」

「魔物が……」

ちらりと隣にいる青年に視線だけを向ける。平然といつもの表情をしている彼の感情はうかがえない。

こんな時に限って邪神の心の声は聞こえない。何か考えがあるのか、単なる魔物の暴走か気まぐれか……。そこでリベリオがペコラを見つめ返した。

「俺の顔に何かついてます？」

「いえー」

姿勢を正す。

「傷の治りが遅くてずっと臥せているのです。なにぶん、こんな辺境では医者みに診てもらう余裕もなく」

「あの、よかったら奥様のようすを診てもいいですか？ お手伝いが出来るかも……」

「いいのですか！ 立ち話もなんですし、とにかく中へ入ってください」

そこではたと気づいたように、二ナの父が集まっている村人に解散を伝えた。

村で唯一の酒場兼宿屋が二ナの家だった。ここに来た本当の目的は話せないのです、神殿からの用事の帰りと伝えたペコラとリベリオの姿に、村中の者が酒場に押し寄せる。

好奇の視線を背に、母親が寝込んでいるという部屋に赴いた。

「……あなた、ニナ……」

ほとんど調度品もない簡素な部屋の中、ベッドで寝ている女性が夫と娘に気づいて苦しげに目を開けた。その枕元にニナが寄る。部屋に入る前にペコラはリベリオに囁いた。

「リベリオさんはどこかで待っていてよ」

「近くにいます。専属騎士ですから」

「違います」

なんだかやたらと押してくる。サブリミナル効果でうつかりうなずいてしまいそうで怖い。

「巫子見習いのペコラ・ハーバーです。少し、お身体を見せてくださいね」

ベッド脇の椅子に座って、汗の浮いた彼女の額をそつと布で拭いた。

許可を得て服を開く。肩から胸元にある獣に襲われた傷口が痛々しい。ペコラには傷を癒す力はないけれど、傷口から入った菌が悪さをしているのなら少しは手助け出来る。

（ダンゴムシくん、いい？）

——キュ。

目を閉じて、精霊の声に波長を合わせた。手の甲の精霊の印を光らせながら話しかけ

ると、思った通り身体の中で無数の菌が好き勝手をしていた。時間をかけて話しかけて彼らをなだめ、目を開ける。苦しげではあるが、呼吸が安定した母親は穏やかな顔で眠っていた。

「……すごい」

ニナの言葉に微笑む。自分よりよほどすごい巫子——大聖女になる少女に。

（あなたならすぐ怪我ごと消しちゃうのにね）

自分にはこれくらいしか出来ないけれど。

「それでもう大丈夫だと思うわ。怪我自体を治しているわけではないので、無理は禁物だけれど」

「ありがとうございます！」

「っ」

頬を染めてまっすぐ見上げる青い目に、ペコラは撃ち抜かれた。

（か、可愛い！）

キュンとする胸を押さえる。にやけた顔で、目の前の頭をよしよしと撫でた。

——可愛い。

そこでまたリベリオの声が聞こえてきた。だが今回は同意だ。

（そうです、ニナちゃん可愛いですよね！）

——あああペコラ様、早く食べごろになつてくれないかな……

違つた。こんな可愛いニナを前にして、なぜペコラをまだ注視しているのだろう。その後も次々と聞こえてくる声に震えていると父親がペコラの手を取つた。

「巫子様、ありがとうございます！ この礼は必ず」

ピシャ！ ゴロゴロゴロ。

その時、突然外で雷の音が響いた。突然のことにびつくりして外を見ると、星空がみえるみる暗雲に覆われ大粒の雨が窓を叩く。立て続けに稲光が空を駆けた。あつという間のどしやぶりに村人たちが慌てて家に戻つていくようすを見ていた父親が、雨戸を閉めた。

ペコラの隣に立つているリベリオが、そつぽを向きながら口を開いた。

「晴れていたのに急ですね」

「……そう、ですね」

ペコラは静かな寝息を立てている母親の汗を拭いた。その間にも雷はゴロゴロと存在感を増していた。

（雷といえバリベリオさん……あの時、助けてくれたんだよね）

昼間、狼を襲つた一撃は偶然とは思えない。

駆けつけたリベリオの表情、逞しい背中、それを思い出して——ペコラは知らず赤くなつた頬を押さえた。

その夜はニナの父親の厚意で宿の一室に泊まることになつた。今日はニナが夜の看病をするからゆつくりしてくださいと言われていた。

（よかった、お母さんが元氣になつて）

あの後、施術のお礼だとニナの父親は一階部分の酒場で存分に腕を振るつてくれた。鳥の丸焼きに牛の串焼き、魚の煮込みに山盛りのじゃがいも。どれもアツアツ出来立てでほつぺたが落ちそうなほど美味しかった。押し寄せた村人に王都のことを話したり皆で歌ったり踊ったり、お腹がいっぱいで楽しい時間になつた。

（ニナちゃんも見つけられたし、あとは六精霊の能力を確認して申請すればすぐ神殿に……あれ？）

寝間着に着替えたところで、はたと重要なことに気づく。

「そうすると話が変わっちゃう……？」

このままニナが巫子の修行を始めてしまうと、孤児で神殿に入る設定も、父の死によ

る魔物に対する強い負の感情も生じない。

（じゃあ、何も言わずにこのまま……いやいや）

村人たちが魔物に殺されるかもしれないのをわかっていて放っておけない。腕を組んで唸りながら部屋の中を回る。

——キユ、キユキユキユ。

何かの遊びと思ったのかダンゴムシがその後ろをちょこちょこ追ってきた。三周ほどして結論を出した。

「よし、リベリオさんのためにも、世界のためにもやっぱり二ナちゃんにはすぐ神殿に行ってもらおう！」

そしてなんとしてもペコラは次の試験に合格し、ここの管轄の神殿に配属してもらうのだ。たとえ不合格で巫子の資格をもらえなかったとしても、神殿の下働きくらいはさせてもらえるだろう。

もし今後、魔物の異変があった場合でも即座に警報を出せば大被害は防げる、はず。

「完璧な計画……！」

我ながら惚れ惚れする。ストーリーが変わってしまったのが構うものか。あくまで主軸は、六精霊やリベリオといちゃいちゃしながら二ナが大聖女になるお話だ。

（それを見られないのはちょっと、かなり寂しいけれど……っ）

ダンゴムシを抱き上げる。

「二人で頑張ろうね、ダンゴムシくん！」

——キユウウ！

頼もしい返事してくれたダンゴムシを抱いてペコラはお日様の匂いのするベッドに潜り込んだ。クッションに頭を預けると、一日の疲れもあって眠りはすぐに訪れた。

* * *

月明かりが照らすベッドに、白い髪のアラシの少女が眠っているのを確認してリベリオは部屋のドアを閉じた。

「……鍵もかけずに」

苦笑して、シャツにズボンだけを身につけた彼はベッドに手をつき、彼女が抱いているダンゴムシを苦しい顔で取り上げる。それを丸めて無造作に床に投げて、ペコラのふわふわの髪を掻き上げた。

長い睫毛を伏せている彼女の体温と無防備なやわらかい肌に触れる。

「はあ……」

シーツの上についた手。その爪が鋭く伸び、根元から黒く染まっていく。変化とともに浅黒い肌の色がじわりとにじむように全身に広がった。

白い刺青が浮き出て、濃紅の髪が鮮やかな朱になり長く伸びる。瞳孔は蛇のような縦長。背中から、蝙蝠こうもりのような翼が生えた。

「……」

異形のヒトの影を映すはずの壁には、巨大な竜のシルエットが現れていた。舌舐めずりをして、邪神は寝ているペコラの頬を手の甲でそつと撫でた。

「……ん」

気配に気づいたのかぼんやりと彼女は目を開けた。

「っ」

そこで上に覆いかぶさる邪神の姿を見て息を呑む。混乱したようすで周りを見る彼女に魔力を込めた声で囁く。

「いつもの夢だ」

「……ゆ、め……?」

途端にとろりと臉を下げるペコラの身体を抱き、腕の中に閉じ込めた。その白い首筋

に顔を埋めた彼は口の端を上げた。

「ああ。けれど今日は少しお仕置きをしよう」

「おしおき……」

「そう」

酒場の主人が触れた愛らしい手を取って舐めた。

「ん、……っ」

「俺から黙って離れた上に、他の男に触らせたからな」

ゆつくりと指先を口に含んで舌でねぶる。ペコラが顔を真っ赤にするのを見ながら、指の側面を長い舌で愛撫して幾度も指の股を舐めた。

——指の一本だけ。それくらいなら構わないか。

舐めるには痛みが一番だ。いつもの夢では効果が薄い。薬指に狙いを定めて口づけると、不穏さに気づいたのかカタカタ震えてペコラが首を振った。

「なに、を」

「お前の指を、食べてしまおうと思って」

ぶわっと、面白いほど彼女の毛が逆立った。

「お、美味しくないです……っ」